

二〇一五年紀行文集

沿岸小漁民とともにマングローブを植える旅

マレーシア・ペナン

2015年12月26日(土)~30日(水)

特定非営利活動法人 PARCIC



## 【目次】

1. 概要
2. 訪問地地図
3. 主な行程
4. 感想文
  - 1) 違ったものが見えてきた旅ーマレーシア植林ツアーに参加して (大歳 恒彦) . . . . . p.3
  - 2) マレーシア再発見の旅 (岡崎 文香) . . . . . p.5
  - 3) 初めてのマレーシア (桃井 美鈴) . . . . . p.7
  - 4) 多民族社会の夫婦円満仮設 (桃井 奉彦) . . . . . p.9

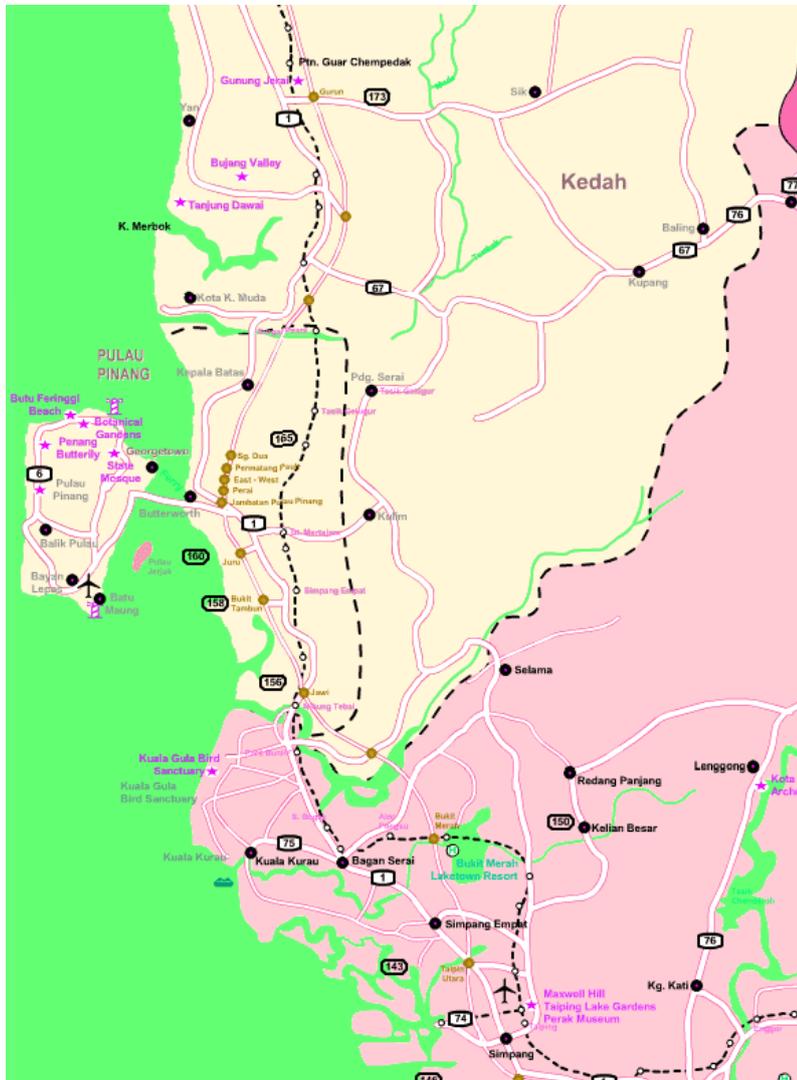
## ツアー概要

訪問地：マレーシア・ペナン

期間：2015年12月26日（土）～2015年12月30日（水）4泊5日

参加者数：5名

## ペナン・ペラ周辺地図



引用元：<http://www.maps-malaysia.com/perak/map.htm>

主な行程 プログラム日程表

日付	時間	プログラム	宿泊
12月26日 (土)	19:30	Vistana hotel のフロントに集合	ペナン島ホテル Vistana Penang Bukit Jambul
	20:00	近くのレストランでプラナカン料理を食べながら、多民族社会に触れる	
12月27日 (日)	AM 8:00	世界遺産の街、ジョージ・タウンへ インド系移民の朝食ロティ・チャナイを食べる	ペナン島ホテル Vistana Penang Bukit Jambul
	PM	英国植民地時代の街並みを訪ねながら、移民の歴史を歩きながら見て学ぶ 昼食：屋台でアッサム・ラクサとチェンドール ペナン人と尋ねるグローバル化時代の開発と環境問題の現場（大規模開発地域とペナンヒル） ペナン島を一周。 夕食は海が見えるところで海鮮料理 ホテル近くのサンデーナイトマーケットを見る	
12月28日 (月)	AM 8:00	ペナン大橋を渡ってマレー半島へ ペナン州 Sungai Ache の漁村に到着 環境と伝統的漁法を続けるマレー人漁民の村で漁民と一緒にマングローブ植林を体験 手作りマレー料理で昼食	漁村でホームステイ
	PM	PIFWA（ペナン沿岸小漁民福利協会）と懇談 PIFWANITA（漁民女性グループ）と伝統的料理 Nasi Lemak をつくって食べる。 伝統的マレー人ハウスに2-3人でホームステイ	
12月29日 (火)	AM	漁船に乗って伝統的漁法と魚市場を見学 イポー市へ車で移動	イポー市 Regalodge Hotel, Ipoh
	PM	昼食：イポー名物 もやしチキンライスを食べる NGO とマレーシアの社会問題(TPP、開発、環境)を話し合う イポー・ホワイトコーヒーとカヤ・トーストでお茶 ホテルにチェックイン	
12月30日 (水)	AM	イポー市から Sungai Siput へ移動 オイルパーム・プランテーションを NGO と一緒に訪ねる 途中で、昼食にインド・バナナリーフカレーを食べる	
	14:00	イポー駅から鉄道でクアラルンプールに移動	



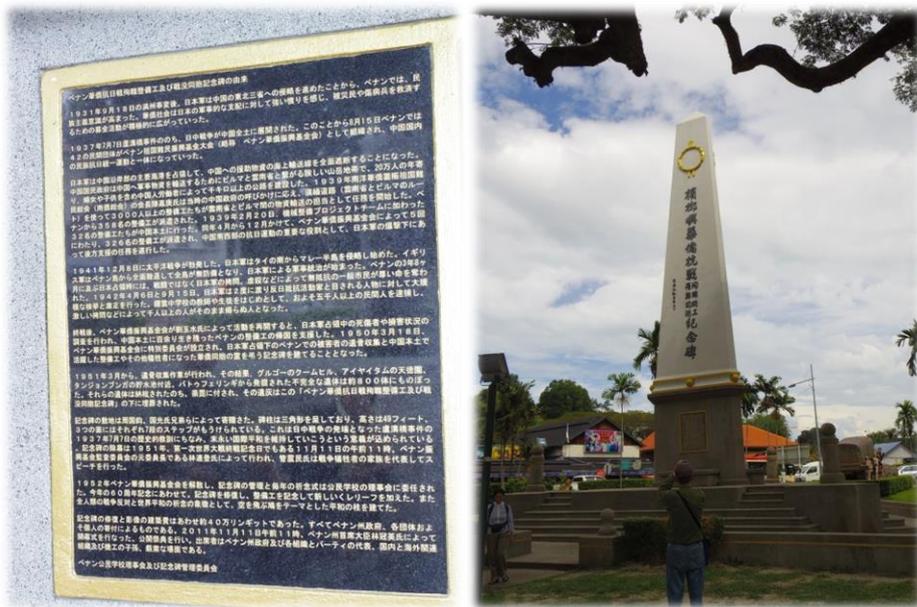
# 違ったものが見えてきた旅—マレーシア植林ツアーに参加して

大歳恒彦

マレーシアには仕事や観光で今までに何回か訪れるチャンスがありましたが、同じ国でも従来とは違ったものが見えてきたのが、今回の「マレーシア・ペナン沿岸小漁民とともにマングローブを植える旅」でした。

マレーシアの魅力は、何といてもトロピカルな気候、めずらしい植物、おいしい食事、フレンドリーな人々などですが、アセアンの優等生といわれるだけあって、道路などのインフラ整備が進んでいることは短い滞在のなかでも実感できました。マレーシアの国民一人当たりGDP(2014年)は1万米ドルを超えているとのことで、同じPARCICのツアーで訪問したスリランカの3倍にもなります。私のうかがったお話しでは、大卒の初任給もスリランカの2倍程度にはなるようです。しかし問題があるとすれば、多くの人々がこのような豊かさを実感できているか、また豊かさが環境の破壊など負の側面に結び付いていないか、ということでしょう。

ツアーの初日に訪問したペナン島のジョージタウンでは、多民族の文化が混在する様子が印象的でした。また、第二次世界大戦の抗日運動で犠牲になった多くの民間人のことや、従軍慰安婦の問題などがマレーシアにもあったことがわかりました。実は、前年に訪問した東チモールでも日本軍の従軍慰安婦のことを知り、このような問題は旧日本軍の活動とともにアジア各地に広く拡散していることを改めて認識しました。海外旅行のガイドブックには載っていないことですが、私たち日本人が知らなくてはならないことだと思いました。また、最近ペナン島では、漁村に残る美しい沿岸地域をリゾート開発する計画が住民を無視する形で進んでいることも知りました。



ペナン島から半島に渡り、マングローブの茂る沿岸地域 Sungai Ache で漁業を営む PIFWA(ペナン沿岸漁民福利協会)の方々の指導で、マングローブの植林をしました。これが今回のツアーの大きな目的です。マングローブの木陰の水辺では魚がたくさん獲れるそうですが、このような湿地帯には多様な生物が生息できることを実感しました。しかし、湿地帯での作業はなかなか体力が要りそうなので、マングローブ林の管理などは難しいこともあるだろうと感じました。漁民女性グループの方々には伝統料理ナシ・ルマツ(ココナ

ツツミルクで炊いたご飯)とサンバル(辛いソース)の作り方を教わり、出来上がったお料理をいただきました。昼食直後だったにも拘わらず、ほとんどの参加者が完食してしまうほどのおいしさでした。やはり、料理は本場でいただくのが一番です。この植林活動などを通じて、漁民の方々のピープル・パワー(「国でも企業でもなく、一般住民の力」というような意味で使っています)を強く感じました。女性グループはマングローブの実から作るジャムや葉から作るお茶などの製品化にも取り組んでいるということで、頼もしい限りで、特に女性の力強さを感じました。植林によってマングローブ林の環境が保全されることを心から祈ります。

最後の宿泊地であるイポーでは、マレーシアの主要産品のひとつであるアブラヤシの広大なプランテーションを見学させていただきました。以前にヤシ油を抽出する工場は見たことがあるのですが、実際にアブラヤシを収穫するところを見るのは初めてです。世界的なヤシ油価格の低迷に加えて、インドネシアやバングラデシュなどから来る外国人労働者の増加による労働賃金の低下など、プランテーションには、生物多様性の喪失などの環境問題以外にもたくさんの課題があることがわかりました。ここでも、労働者を支援する政治団体のピープル・パワーを強く感じました。

マレーシアの多様な側面とピープル・パワーを知ることができたツアーも終点に近づきました。イポーから首都クアラルンプールまでの快適な高速鉄道、クアラルンプールの大都会の姿などはマレーシアの表の顔です。短い期間でしたが、今まで気が付かなかったいろいろの違ったものが見えてきた、とても有意義な旅でした。このような素晴らしいツアーを企画・実施された PARCIC の事務局およびコーディネーターの方々に心から感謝いたします。また、ツアーにご一緒させていただいた参加者の皆さんにもたいへんお世話になりました。あわせてお礼申し上げます。



## マレーシア再発見の旅

岡崎文香

2015年12月、マレーシアへのスタディツアーに参加した。1993年に初めて首都クアラルンプール(KL)を訪問して以来、4回目のマレーシアだったが、実は過去3回はいずれもKLに2日滞在しただけだった。なので、今回のツアー目的地のペナン島も当然初めて訪問する場所だった。

12月26日、飛行機でペナン島に降り立ってみると、高いビルが立ち並ぶ都会で驚いた。その夜、ツアーの参加者の皆さんと夕食のテーブルを囲んだ。桃井さんご夫婦と大歳さんと照代さん。最近では自分が年長者になる場面が多いのだけれど、何とここでは最年少だ。少人数でアットホームな雰囲気に加えて、人生経験豊かそうな皆さんの度量の大きさを感じて、張りつめた気持ちがほどけていった。

翌27日は観光を兼ねたペナン島周遊。インド系、マレー系、中華系の文化がモザイクのように入り混じるジョージタウンは通りの角を曲がるたびに違う表情を見せ、さすが世界遺産、飽きることがない。しかし、夕方に訪れたマレー系の漁民の村では、のどかな海辺の町であったペナンに巨大な開発の波が押し寄せ、人々の伝統的な静かな暮らしが蝕まれつつあるのを目の当たりにした。

その翌日の28日はいよいよパルシクの支援するPIFWA、PIFWANITAの活動地域へ。マングローブにもいろいろ種類があり、ジャムやお茶に利用できる種類もあるというのは初めて知った。マングローブ林は3つに大別することができるそうだ。ひとつは土地の浸食を防ぐ種類のもの、二つ目は水中の生物のえさになる種類のもの、そして三つ目は陸の動物のえさになる種類のものだそうである。それぞれに役割があるので、PIFWAでは、あまり生えていない種類のことを意図的に植えているそうである。



PIFWA、PIFWANITAの歴史やマングローブについての説明を聞いた後には、いよいよ実践である。緑のマングローブ林を両側に見ながらトレールを歩いて行く。不意にトレールが終わると、そこが植林する場所であった。恐る恐る泥の中へ足を踏み入れると、地面はゆるゆるとして何とも心もとない。イリヤスさんが手際よく掘ってくれる穴の中にへっぴり腰でマングローブの苗を植えていった。今日、私たちが植えたのはほんの何十本かに過ぎなかったけれど、身動きのとりづらい泥の中で数十分動き回っただけでへろへろであった。行きがけに見たマングローブの林が一本一本手で植えられ、成長してきた過程を思うと、その努力の積み重ねに圧倒される思いだった。壊してしまうのは簡単なのに、それを再生するには何て膨大な忍耐と根気が必要なのだろう。しかし、それを一つ一つ着実に積み重ねてきたPIFWAの活動のすごさが身に染みて分かった。

午後にはPIFWANITAの女性たちが料理教室を開いてくれた。作ったのはナシ・ルマーとサンバル。手際よく、あっという間にできてしまった。実は直前にランチをお腹いっぱい食べてきていたのだけれど、とても辞退できる雰囲気ではなく、また盛り付けられた料理がとても美味しそうで、私たちはその日2回目のランチに手を付けた。これがとても美味で、結局お代わりまでしてしまった。これは絶対自分でも作れるようになると思った。

翌 29 日はオイルパームプランテーションを訪問した。小さな赤い実がびっしりと詰まった数十キロもあるオイルパームの塊を高い枝から落とし、トラクターに積み込む作業は大変な重労働だ。最近ではインドネシアからの出稼ぎに来た青年たちが低賃金で働いているようだ。辺りは見渡す限り、はるか遠くまでオイルパームが植えられており、それだけ森林が伐採されたということなのだろう。パームオイルは様々な加工食品に使用されており、日本が消費するのも相当な量に上る。我々の食卓の裏側で何が起きているのか、知らないままではいけないのだと強く感じた。

その後、プランテーションにも同行してくれたサラスさんが所属する政党、PSM のペラ州の支部の一つを訪問した。その時、お会いしたのは皆、女性だったが、皆、芯の強そうな印象の人たちだった。その中でもサラスさんのパワフルさは群を抜いており、ペラ州で起こっている様々な問題と、PSM がそれにどのように取り組んでいるかを熱心に説明してくれた。損得勘定に見向きもせず、この人は本当に正義の人なのだなと感じた。

そして翌日、イポーからクアラルンプールへの列車の旅が 5 日間のツアーの最後のプログラムとなった。駅の食堂で早めの夕食を囲んで、別れを惜しんだ。大きなトラブルもなく、天気にも恵まれ、参加者の皆さんとも仲良くしていただき、びっくりするほど順調で楽しい旅だった。食べ物もとても美味しかった。正直、以前にマレーシアに来た時は食べ物が美味しいという印象は全くなかったのだが、今回は毎日、美味しいものを食べ続けた記憶が鮮烈に残っている。

しかし何よりの収穫は、マレーシアにも様々な問題が起こっているのを知ることができたこと、そしてその問題に向き合い、社会を変えていこうと立ち上がり、真摯な取り組みをしている人々に出会えたことだ。世界はなぜこんなにも苦しみや悲しみに満ちているのだろうと思うことがある。しかし、そんな人々に出会うたびに、世界はまだ希望を失ってはいないのだと感じる。そして「あなたも頑張りなさい」と背中を押されたような気がするのだ。このスタディツアーに参加できた巡り合わせに心から感謝したい。



## 初めてのマレーシア

桃井美鈴

2016.1.8

パルシックのツアーに申し込んだのは、マングローブ植林とホームステイが体験できるからでした。以前から中国黄土高原の植林NPOの会員で、砂漠の緑化は体験していました。砂漠といっても、もとの砂漠だったのではなく、人間の活動が、北魏の時代から森を伐り倒しさらに 20 世紀の温暖化で、砂漠化させた所なのです。

マレーシアの植林は水辺でしたが、同じ人間の活動、開発が原因であり、また同じように、植えたあとの森を育て続けることの大切さをサポーターに理解してもらうのが重要なことを感じました。

私はどちらかというと辺境の地を旅するのが好きですが、幹線道路から遠くに見える村落の中でどんな暮らしがあるのか、地元の人と一緒に何かしながら学ぶという体験は大好きです。ですからマレー系の人たちの村にホームステイさせていただき、朝、昼、夕、一日 5 回というイスラム寺院から朗々と響いてくる祈りの声にはびっくりしました。私の住んでいるところは長野県の限界集落で、町が設置した防災スピーカーから、「クマの出没情報がありました！」というご注意が時々流れます。これも都会の人には面白いと思いますが、マレーシアのホームステイ先では、お父さんが、寺院にお祈りに行く恰好でスタンバイしています。

マレーシアでは、マレー系中国系インド系の人たちが大多数で、その人たちはそれぞれ別の習慣、宗教、食べ物、があって、それが小さな地域でも色鮮やかなモザイクのように混在しています。ですから一日の中でも会う人ごとに、違う習慣を相手を持っていることを頭に入れて付き合っているようです。例えばツアーの運転手さんはマレー系だから、インド料理や中華は食べないな、とか、今日のガイドさんは中国系だけれどマレー系のイスラム教徒の奥さんと結婚して改宗したから、豚肉料理は食べないし、ガイドの途中で「お祈りしてくるけど、いい？」と木立の中に消えて行っても、みんな当たり前のように芝生に座ってくつろいで待っている、プランテーションを案内してくれた女性活動家はインド系の人だから、「彼女との昼食はカレーになるね」と、その日のツアースケジュールに入れる。

こういう感じ初めて！ 面白い。

私たちが日本人でどれでもOK、だから、相手次第で変えられるのか、マレーシア人同士だったら異文化の人との、時間の約束や食事会はどうするのだろう、、、？

実は私は台湾系日本人でキリスト教徒です。私の祖父が戦前に貿易で日本に来て父母の代で日本に定住し、子供を育てました。私は三代目、というわけですが、全く日本人に同化しています。（言わなきゃわかんなかったでしょ？） マレーシアでは移民四代目でも、しっかり先祖の文化を持っているのは、何がそうさせているのだろうか？それもそれぞれ離れたところに住む、ではなく互いに近いところに住んでいながら、、、。

ある意味うらやましかったのは、「私はイスラム教徒、お祈りの時間頂戴ね、」と表明できることでした。日本人としては、自分の信仰をわざわざカミングアウトさせるのはちょっとしんどいです（とは、私を感じていることで、周りの人は気にしないかもしれないけれど）。

「多民族国家」と一言の、多くの内容を体験できたのは初めてでした。

最後に女性活動家サラスさん、「政権取ることよりも人々のために働くことが重要、」と、からりと言って働いている人。私に近い年齢とおもわれる、私もまだすることがある、彼女みたいに、からりと笑って働こう。

同行してくれた大塚照代さんガイドや通訳をしてくれたジュールさん、リンデンさん、本当にありがとう、いい旅でした。



## 《多民族社会の夫婦円満仮説》

もものいともひろ  
桃井 奉彦

今回のマレーシアツアーでは、私にとって初めての事がいっぱいあって、だから驚くこともたくさんあって、また日替りの土地のガイドによる深い話や裏の話もあって、とっても中味の濃いツアーになりました。ありがとうございました。

中でも私にとって一番興味深かったのは、多民族・多宗教の社会が長期間内戦も無く持続していることでした。マレーシアはマレー半島部とボルネオ島北部に分けられますが、半島部の民族構成は、マレー人と先住民族が50%強、中国系が30%、インド系とその他が10%ほどだそうです。そして婚姻など民族の融合は少く、それぞれの民族社会が個性を保ちながら多面的に交流している「複合社会」は、他の多民族社会と比べて特徴的だとガイドブックにあります。何々所々の町を見た私の印象でも、街中に小さな民族コミュニティーが入り混じり、お互いに利用し合ったり交流していると感じました。

どうもこの辺が、マレーシアの多民族社会持続の一番の元なのかもと感じました。本によると、マレー人の特性は礼儀正しく謙遜で寛容であり、歴史の上ではさまざまな民族を受入れてきたとのこと。実際に街中にお寺・教会・モスクなどが隣り合うようにあったり、とっても珍らしく驚きました。

18世紀のイギリス大航海時代からイギリス植民地時代にインドや中国から大勢の労働者が移住。特に莫大な資本を投じたスズ鉱山と広大なゴムのプランテーション開発での移住が大きかったようです。後に、合成ゴム出現によってゴムからパームヤシに転換されてもプランテーションのシステムは変わらず、現代でも大きく深い問題を持つことにも驚きました。

1969年のマレー人と中国人の民族衝突という大惨事を機にアムノトラ(土地)政策が始まり、以来マレー人の貧困解消と教育を中心にマレー人優遇政策が続いており、役人にはほとんどマレー人がなっているのだそうです。結果的に、その後大きな民族衝突は起きていないという話です。

ちょっと整理してみますと、①お互いに風俗・習慣・宗教の違いを認め尊重し合う。②住み分けと交流。③小競り合いで爆発を防ぐ。となるのではないしょうか。具体的には「小さなコミュニティー混在」という住み分けが、この①～③を実現しやすく、その元には寛容の心が大事となっているのではないしょうか。

そして、ハッと気づきました。かねがね感じていた夫婦円満のコツ、①(元は赤の他人なのだから)遠くで当たり前、②つまずき離れず、③小さな小競り合いで爆発を防ぐ、とまったく同じで驚きました。でも、どちらも人間のすることだから、と納得できますよね。

今、シリア難民などで仏独英などEUの国々で多民族・多宗教化が急激に進行してきて、あちこちで混乱と試行錯誤が始まっています。もし、この「多民族社会の夫婦円満仮説」があり得るならば、EUの国々でも試してみる価値はありそうかな〜!? という感想でした。







◆お問い合わせ

特定非営利活動法人 パルシック

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-7-11 東洋ビル1階

Tel: 03-3253-8990 Fax: 03-6206-8906

Web: [www.parcic.org](http://www.parcic.org) E-mail: [office@parcic.org](mailto:office@parcic.org)

---